法学部センター利用入学試験（2次）　訂正

【小論文】

問題用紙　問題文上段、後ろから１４行目

（誤）ブロセス

↓

（正）プロセス

早稲田大学法学部
二〇〇五年度・大学入試センター試験を利用した入学試験
【第二次試験・小論文試験問題】

以下の文章はカナダの社会学者が書いたものである。これを読んで、あなたもその一員であるこの社会をどのようにしていったらよいかを千二百字以内で述べなさい。

9月11日以後の監視は、疑念の網を拡張し、秘密の闇を深める恐れがある。「セキュリティ」と「リスク」の名のもとで、実際に何が起こっているのか、よくわからないまま、多くの実践やプロセスが幕を開けている。かくして、特別待遇、あるいは排除のために他者を分類し選り抜く者たちのもつ権力に対する問いはその口を塞がれた。公式上の分類には資源と利益の分配が重要なので、21世紀にはこの分類は主要な社会学的課題になりそうだ。疑念のカテゴリーは、9・11以前から分類化の一手段であったが、その領域はいまや急速に拡大している。

秘密主義についていえば、これは、「テロとの戦い」に関する関心によって生活様式のなかにはっきりと確立されつつある。もろもろの決定――とりわけ分類の決定――を見えにくくしているいくつかのテクノロジーの使用もそれに影響を与えている。最初は意図的に、次は意図的ではない、あるいは少なくとも、はっきりそうとは言えないかたちで影響しているのだ。権力が秘密裡に行使されているときには、少なくとも堕落と不合理のリスクがそこにあるし、さらにシセラ・ボクが論じるように、このような秘密主義は自らその傾向を強めている。説明責任なしに権力ばかりが増強しているが、より強大な権力が蓄積するとますます秘密が必要とされるようになる。秘密主義のデジタル的側面に鑑みて私が留意していることは、自動化がどのような方法でシステムを不透明にする傾向があるのか――特に最もデジタル的側面がシステムに影響を与えやすい――ということだ。

このような疑惑と秘密主義の文化は、反倫理的であり、反政治的である。この二つが組み合わさると、信頼を失墜し議論を閉ざしてしまうことになる。リスク管理とセキュリティへの主要な鍵を握る難問が少なくなることは、リスクのプロファイルが関係性、制度、場所に適用され、可能な限りどこであっても対応が自動化されるようになるということだ。これこそが国境管理とスマートカードを内蔵した身分証明書が重視される理由である。しかし、これは、裁判権や権限に対する問い、個人や団体が国境を横断するときの複雑な理由、社会的、法的コンテクスト等に対するあらゆる懸念を取り去ってしまう。さらにこのことはある特定の国々にとっては特別な意味をもつ。アメリカが提起した「大陸国境安全保障（perimeter continental security）」の場合、もし共通の出入国政策が確立されることになれば、アメリカ・カナダ間の関係は明白に変化することになるだろう。

遺憾ながら、すでに9・11以前からリスク管理とセキュリティや監視の実践に関する動きが現れていた。それらはその後もなお無条件に支持されている。微妙だが深刻な社会的分類化のプロセスは、真の「リスク」と共に稼動している。真の「リスク」はリスク管理という言葉が優先される状況では見えにくく、無関係なものに見えてしまう。リスク管理は科学的根拠によって信頼を得ているようだが、これは多くの人々――特定の場所に暮らす生身の身体を有する人々――にとって問題となる重要な意味を奪ってしまうのである。カテゴリー化していく様式は、実際の人物や場所には全く注意を払わず、一見無害に見えるが、現実には人々や場所に影響を与えている。だがこうしたプロセスの作用は一般の人々の手には届かないことが多いため、それは官僚制やテクノロジーの手中にとどまることになる。

「テロリズム」に対する反響はあまりに安易に全体主義的傾向を引き起こす可能性がある。ハンナ・アーレントが明敏に指摘していることだが、それは究極的には恐怖に関することだ。私が言っているのは、反テロリストのレトリックに影響された国々の最近の政策は、それ自体が恐怖に基づくものだということではない。アーレント自身、20世紀の全体主義の種子と萌芽に関心をもっていた。彼女はそうした全体主義の萌芽は自分勝手な神話の信仰と深く関わっていると考えていた。今日、保障された安全、リスクなき監視など、不公平で受け入れがたい政策を正当化するために利用されてきた無根拠な神話がふんだんにある。しかしまた、アーレントの仕事は別の点で的を射ている。クレイグ・キャルホーンが想起させるように、アーレントは全体主義が家族や個人の私的な生活に直接

あるいはその内部において働きかけていると考えており、それはフーコーが示唆した権力の現代的形態である。今日それは監視の実践へとかたちを変えているが、その危険性は明らかである。

監視の影響や危険が明白になるのは毎日のありきたりな生活のなかにほかならない。9・11以後の監視は私たち誰もに疑問を投げかけている。あるいはむしろこう言ってもよい。問われるべき問題を提起しているのだ、と。私たちが暮らしたいのは一体どんな世界なのだろうか。要塞都市アメリカなのか。それとも安全体制が整ったヨーロッパなのか。2003年初頭、焦眉の問いは、サダム・フセインを追放するためにアメリカとその同盟国がイラクを攻撃すべきかどうかということであった。しかしテロとの戦いが拡大するにしたがい、一般市民も自らこう問い直すべきである――私たちは「本国」で「戦争」を支援すべきなのかどうか。もしそうでないのなら、なぜ、セキュリティに対してオルタナティヴなアプローチを求め、それを進展させることなく、単に疑惑の網を引き伸ばし、恐怖に満ちた雰囲気をより促進し、管理の風潮を確立し、疑わしい監視技術をその対抗手段として商品化するのだろうか。

「テロとの戦い」に根拠なく実行されるセキュリティと監視の状況に対して、多様なレベルの抵抗が必要とされている。プライバシーを懸念する人々は、強化された監視に疑義を示すことを思い止まってはならない。彼らもまた、人々の生活の機会を査定し影響を及ぼす「仕分け者」による深刻な社会的帰結を考察するために、「詮索」だけを認める見境ない個人主義を乗り越えて進展していくべきだ。雇用、教育、その他の分野に蔓延する懐疑心を嘆く人々は気を揉んでいるだけではいけない。人々を連帯に導き、アラブームスリムといった烙印を押された団体を迎えいれ、恐怖を煽るのではなく信頼をもたらす引き金となる機会はたくさんある。

不要あるいは不正な法に対する意見が書類や政治家宛のメッセージに表されるのと同じように、多くの人々は新しいテクノロジーに関する反対意見を聞いてもらえるような機会をもっている。なぜスクールバスにビデオカメラが必要なのか。なぜ「万一のために」、政府のデータベースが個人情報を所有しなければならないのか。これらの問いはしかるべきものだが、他者に訴えなければ何にもならない。個人データを取り扱う仕事をする人々はその説明責任に応えるべきだし、いかなる目的であれカテゴリーの作成に関する情報をもちそれに関わる人々の要求についても応答すべきである。

9・11以後の監視は私たちにきわめて重大な難題をつきつけている。その難題とは、何よりも、社会的排除という閉鎖的な世界にどう直面するか、また分類化と秘密の権力の増大にどう抵抗するかということだ。ルネサンス期には、平和と繁栄は科学と技術をとおしてもたらされるだろうという考えが根を下ろしており、この考えは、ヨーロッパの啓蒙主義によって支えられていた。その時以来、セキュリティ技術の試みが優先されるようになり、それによってすでに述べたような数多くの神話が生まれ、また私たちが現在目のあたりにしている非常に困難な諸問題をもたらすことになる。問題は、ルネサンスと啓蒙主義が優先事項を転倒するよう促進したということだ。

しかるべき倫理は〈他者〉の声に耳を傾けることから始まる。そして社会的配慮は、〈他者〉を疑うことではなく、受け入れることから始まる。しかしながらこのような倫理は文化の真空状態のなかには存在しない。望ましい世界のヴィジョンを共有した土壌において若芽のように成長するものなのである。だが、このようなヴィジョンは、マスメディアが歴史を軽視し、現在を守ることで政治家が手一杯になっている今日、希薄になっているようだ。平和とセキュリティを生み出す試みは、恐怖が拡大し希望が縮減した世界のなかで約束を履行することはなくなった。この「定着しつつある」心性も、まるでそんなものはなかったかのように、その他の選択を無視しがちである。

ジャック・エリュールは、バビロンやニネベのような古代都市の運命を振り返りながら、かつてこう述べていた。すでにそれらの文化も幕を閉じてしまったが、「外壁と仕掛けに装備されたセキュリティによって外部の攻撃から身を守ったのだ」と。これは何か目新しいことだろうか。だがこれに対してエリュールはさらにこう主張する。正義と隣人への愛を念頭においた都市のヴィジョンがまず第一義的に考えられるべきだ、と。〈他者〉への応答責任を果たすことから、平和と繁栄、自由と安全が始まるということ、そうでなければ、優先すべきことを取り違えてしまうだろう。それこそが決して門戸を永遠に閉じることのない都市である。それは内包性と信頼からなる場合である。そしてその光こそが最終的に今日闇のなかでおこっているすべてのことを払拭してくれるだろう。

（デイヴィッド・ライアン著『9・11以後の監視』より）